

## 〔コメント〕 和辻哲郎『イタリア古寺巡礼』

浅野 洋

近畿大学文芸学部の浅野です。私は和辻哲郎の専門家でもイタリアの専門家でもありません。なのに、なぜここにたっているかと申しますと、約十年前（1997～8）、八ヶ月間ほどイタリアに留学しました折り、今回の共催者であるイタリア国立東方学研究所々長の Silvio Vita 先生と親しくなりました、また、同じく今回の企画を共催された中川成美先生とも親しくて、それでいつのまにか巻き込まれたというわけなんです。

さて、和辻の『イタリア古寺巡礼』に関して、非常に疑問に感じたのは昭和2～3年にかけての和辻のイタリア滞在の経験が、実に20年以上もたってから、1950年（昭和25年）によく出版されたという奇妙な事実です。この時間差は一体なんだったんだろう、と。今日のお二人の発表に言及はなかったんですが、そういう問題を考えました時、『イタリア古寺巡礼』に先立つ『古寺巡礼』のケースが思い出されます。こちらは、大正8年5月に刊行されたんですが、その前年、大正7年5月に友人たちと関西を散歩した経験を記したもので、1年後にすぐ出版されているわけです。それに対して、『イタリア古寺巡礼』は体験から極めて長い時間を経て20年以上、間に戦争が挟まっている状況があるんですが、この時差は何だったんだろうかということがまず疑問に思われたわけです。

そこで考えましたのは、『古寺巡礼』が、戦時色が濃くなっていく段階で、再版を出そうと思ったら当局から圧力が加かって絶版を余儀なくされたという事実です。なぜ当局が『古寺巡礼』に圧力をかけたのか、僕には不思議なんですが、もしかすると、羹に懲りて鱈を吹くじゃありませんが、そういう経験が人一倍、和辻哲郎に出版することを慎重にさせたのではないかという可能性はあります。その二冊を並べてみますと、明らかに『古寺巡礼』のエキセントリックな表現に対し、『イタリア古寺巡礼』の方は、はるかに抑制された、もちろん古代ギリシャ彫刻に対する熱意は出ているのですが、全体の文章として『古寺巡礼』におけるエキセントリックな感じが抑制されているというか、抑えて書かれているのではないかという気がします。それが1点。

2点目はギリシャに固執する理由。これは竹山先生も言われましたが、『古寺巡礼』の中の法隆寺の夢殿の章のところで、その前後に日本の古代の舞曲、器楽に関して古代ギリシャの仮面劇が影響を及ぼしているという描写がありまして、そこからすでに和辻哲郎の中で固まっていた部分もあるのだろうということが考えられます。しかし、それにしても『古寺巡礼』の段階で、なぜギリシャなのかというのが逆にひっかかるわけで、たとえば、もう一つの問題を合わせ鏡として、大正教養主義の時代にギリシャを鑑仰する文化思潮がなかったのかどうか。僕自身は詳しくありませんので、会場からご教示いただければありがたいと思いますが。

大正教養主義を担った連中はほとんど夏目漱石のお弟子さんなんですね。和辻哲郎はドイ

ツに昭和2年～3年にかけて留学しており、その際にイタリア旅行を経験している。もっと早い時期に寺田寅彦が明治43年に留学してイタリアを訪れている。それから同じく漱石の弟子でありました阿部次郎、大正教養主義の中心的な人物ですが、大正12年にイタリアを訪れている。漱石の一番弟子ともいえる小宮豊隆が大正13年にイタリアを訪れていて、さらには安倍能成がやはり大正13年にイタリアを訪れている。寺田寅彦は時期が早いですが、阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆という漱石門下の連中が相次いで大正12、13年にヨーロッパに渡ってイタリアを訪ねている事実があって、そういう彼らのイタリア体験と和辻哲郎のイタリア体験に何らかの関係があったのか、なかったのかということももう一つの問題です。そこにギリシャの問題がどのように引かかるとははまだわかりませんが……。

そこで突飛なことなのですが、和辻哲郎のギリシャ熱というのは、たとえば近代オリンピックの創始者でありましたフランス人のクーベルタンがオリンピックを開始した流れと全く無縁なのだろうか、と。クーベルタンは一方的に賛辞を送られるべき存在ではなく、当時のナチズム、ファシズムに対して強い支持を送った人物でもありますし、同時に彼は白人主義であり、男尊女卑的考えの持ち主でもあったわけです。たとえば、クーベルタンのヨーロッパ文化におけるギリシャ中心主義思想、これが近代オリンピックの第一回（1896、明29）開催地をギリシャにするという事実につながっていくわけで、そうした流れとファシズムの台頭（ムッソリーニ内閣の成立は大11・10）が整合するのかどうか、詰めが甘いのでよくわかりませんが、そういう近代オリンピック発祥にかかわるギリシャ回帰主義というか、そういう問題が世界的にどこまで伝播していたのかどうか、もしかしたらそうした状況と和辻哲郎の視線に何らかの関係があるか、今の私には明確な道筋もはっきりした解答もありませんが……。ついでに述べておけば、日本のオリンピックの初参加は、一九一二年（明45）の第五回ストックホルム大会で、クーベルタン会長の熱烈な呼びかけに応じ、東京高等師範の校長であった加納治五郎を団長とするごく少数の参加でした。もちろん、オリンピックのギリシャ回帰主義と和辻のその結びつきは、まだ単なる思いつきにすぎません。

和辻にイタリア人に対する言及がないこと、昨日の発表でもありましたが、これは1928年1月13日の条にホテルに泊まった和辻哲郎が、イタリア語が不自由であるということをご自身から告白しておりますので、多分、自分がイタリア人たちと親しく接してコミュニケーションを交わすこと自体が大変困難だったんだらうと。同じホテルに同宿したドイツ人と一緒にひそひそ言葉を交わして、そこで「イタリア人は煩いね」というような会話を交わしているところを見ますと、コミュニケーションツールの不足が、イタリア人の具体的な描写の乏しさになっているのかもしれない。また、ボンベイでの簡素な描写からいきますと、ローマ時代の人間の生活にあまり関心を持っていない和辻哲郎も、一方に在るわけですね。そういう生活感覚の希薄さも原因しているのかどうか。

Oliviero Frattolilloさんの発表で、当然とはいいいながら僕が面白いと思うのは「和辻哲郎の紀行文がイタリアが他者の目にどのように映ったかを知るための貴重な証拠になる」と最初におっしゃいました。これは日本の伝統的な美も実は外国人によって発見されているわけです。フェノロサ、その弟子の岡倉天心を通じて外国人の目によって日本の伝統的な美が発見されていて、そして和辻哲郎も岡倉天心に傾倒している部分があって、そういう意味では外国ルート

で日本の伝統的な美意識が発見されている。それは逆にイタリアも外国人の目によって発見されるという構図になるだろう、と。外からの目、他者の目によって改めて歴史的伝統が倒立した形で発見されるという、そういうところも、今後、いろいろ問題を考えていく上で注目していかないといけないことではないかな、と。

ちょっと異論を言いますと、今日の Frattolillo さんの発表の3ページ目で「感情の記録になっています」とあります。しかし、和辻哲郎はほとんど感情を動かしていないわけで、むしろ「観念の告白」になっているだろうという気が僕にはしました。

旺盛な生命力と太陽の国イタリアというトポス、これは昨日来から出てきていますように北ヨーロッパから南に向けて南下していくゲーテの『イタリア紀行』などにある、ある種の形式化されモデル化された南方志向であるわけですが、そういうゲーテ的な「観念」ももっと詰める必要があるのではないかという気がしました。

もう1点、『イタリア古寺巡礼』において景色とか天候、風景に対する注目が強いというのは、御指摘の通りですが、そういう『イタリア古寺巡礼』に出てきた景色、風土、気候等に対する注目が、やがて彼の『風土』という著作につながってくるという指摘です。確かにそうなんだろうと思いますが、一つは丁度、当時、ドイツに留学していた和辻哲郎が勉強していて、ベルリンで学んだハイデッカーの実存主義とかフッサールの現象学とかデュルタイの解釈学とか、ドイツ留学で研鑽した学問的な積み上げが「現象としての風土」を「学問としての風土」に引き上げるための何らかの刺激になったのではないかというプロセスにも注意を払う必要があります。そのあたりと『イタリア古寺巡礼』の記述との関連性も、もう少し押さえておいた方がいいんじゃないかなという気がいたしました。

思いついたこと、突飛な思いつきも含めて感想を申し上げました。今日、発表された二人の先生に限らず、会場からもご教示していただけることがあったらありがたいと思います。

以上でコメントを終わります。